



IRBM アイアール  
ビーエム ⊕ IRBM ⊕ IRBM

㊦ intermediate range ballistic missile

中距離弾道ミサイル。中国が保有するIRBMには東風4 (DF-4/CSS-3)、東風3 (DF-3/CSS-2)、東風21 (DF-21/CSS-5)がある。

東風4は射程4750 kmで液体燃料を使用した2段式の弾道ミサイルで1980年来実戦配備されている。射程上、米国本土には届かないが、アジアに駐留する米軍基地あるいはロシア、インドなどを標的に攻撃が可能である。東風4は通常、山地の洞窟内などに置かれ、発射時にはそこから引き出して、射撃、あるいは直接サイロから打ち出される第1世代の弾道ミサイルである。

東風3は射程約2800 km、液体燃料を使用した1段式の弾道ミサイルで、開発は60年代中頃からはじまり、70年代末までには完成し、第2砲兵部隊に配備された第1世代の弾道ミサイルである。その後、88年以降には改良されたモデルの東風3Aが東風3に代って実戦配備についている。

東風21は射程1800 km、中国初の固体燃料を使用した2段式の弾道ミサイルで、これは潜水艦発射弾道ミサイル巨浪1 (JL-1)を陸上用に改良したものである。東風21は道路移動が自由にできる車載式弾道ミサイルで機動性があり、かつ固体燃料を使用しているため発射準備が短

時間で完了できることから即応性や残存性の面で優れていると言える。㊦《中国導彈及其戰略》、‘Chinese Defence Today’

㊦ 東風4、東風3、東風21 (岡山克彦)

愛国奉獻教育 あいこくほうけんきょういく ⊕ 愛国奉獻教育 ⊕ àiguó fèngxiàn jiàoyù

㊦ education in patriotism and contribution

解放軍における政治教育あるいは徳育の一つ。中央軍事委員会主席江沢民が唱導した四つの教育 (①愛国奉獻教育、②革命人生観教育、③艱苦奮闘教育、④尊幹愛兵教育) の一つ。幹部に対し、愛国心と滅私奉公の精神を涵養することを目的とする。㊦《中国海軍百科全書》(山内敏秀)

ICBM アイシー  
ビーエム ⊕ ICBM ⊕ ICBM

㊦ intercontinental ballistic missile

大陸間弾道ミサイル。射程5500 km以上の弾道ミサイル (SALT IIでの米ソの規定) を指す。中国が保有するICBMには、東風5 (DF-5/CSS-4)、東風31 (DF-31/CSS-9) および開発中にあるとされる東風41 (DF-41/CSS-X-10) がある。

東風5は射程1万2000～1万5000 km、米国本土を攻撃することが可能な液体燃料を使用した2段式の弾道ミサイルである。1960年代はじめから開発をはじめ、71年9月に初の飛行実験を行い、数回の失敗などを経て、性能の改善および向上を図り、80年代に実戦配備についた。その後、東風5は射程の延長などの改良を加えたDF-5A (東風5A) タイプに更新され、20基ほどが米国に照準しているとされる。基本的に固定した基地に配備されているため、衛星などから常に監視・標定されていることから先制攻撃を受けやすいという特性がある。この弱点を克服するため周辺に多くの偽基地や攻撃を受けても耐えうる堅固な基地に弾道ミサイルを配備しているとされる。

東風 31 は射程 8000 km、ハワイやアラスカなど米国の一部を標的に攻撃可能な固体燃料を使用した 3 段式の弾道ミサイルである。東風 31 は TEL と呼ばれる弾道ミサイルを、運搬・起立・発射ができる車載式弾道ミサイルのため機動性があり、かつ液体燃料を使用したミサイルよりも至短時間で発射準備が完了できることから、即応性や残存性の面でも優れていると言える。

東風 41 は DF-5A の後継の大陸間弾道ミサイルとして開発中にあるとされる。東風 41 は射程 1 万 2000 km、米国全土を攻撃することが可能な固体燃料を使用した 3 段式の弾道ミサイルである。

東風 41 は東風 31 と同様の車載式弾道ミサイルとされ、現在のところ、詳細は不明であり、試験が実施されたとの報道は見られていない。開発を一時中断、あるいは延期しているとの見方もあるが、対米核抑止力の維持・向上をはかる上で、中国は継続して同ミサイルの開発に力を入れているものと見られ、今後の開発動向が注目される。㊦『中国導弾及其戦略』、『Chinese Defence Today』㊧東風 5、東風 31、東風 41 (開山克彦)

### ASEAN 地域フォーラム アセアンちいきフォーラム

㊨东盟地区论坛 ㊩ Dōngméng Dìqū

Lùntán ㊪ ASEAN Regional Forum

1994 年より開始されたアジア太平洋地域における政治・安全保障分野を対象とする全域的な対話のフォーラムであり、安全保障問題について議論するアジア太平洋地域における唯一の政府間フォーラム。通称は ARF。ASEAN10 カ国(ブルネイ、インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン、シンガポール、ベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジア)と日、米、加、豪、ニュージーランド、韓、

北朝鮮、中、露、パプアニューギニア、インド、モンゴル、パキスタンの 23 カ国および EU が参加。政治・安全保障問題に関する対話と協力を通じ、地域の安全保障環境を向上させることを目的とする。外交当局と国防・軍事当局の双方の代表が出席。①信頼醸成の促進、②予防外交の進展、③紛争へのアプローチの充実、という 3 段階のアプローチを設定して漸進的な進展を目指している。現在は第 1 段階から第 2 段階の過渡期に位置づけられている。㊫外務省「ARF (アセアン地域フォーラム) の概要」(門間理良)

### ASEAN+3 アセアンプラススリー ㊬东盟+3

㊭ Dōngméng+3 ㊮ ASEAN+3

1997 年より ASEAN 諸国に日本・中国・韓国を加えて開かれる首脳会議・外相会議。同年のアジア通貨・経済危機により、日本を含む東アジア諸国が地域協力の必要性を強く認識したことが発足の背景。当初は東南アジアと北東アジアの諸国による経済協力関係の強化が主目的だったが、現在ではテロおよび海賊対策、朝鮮半島情勢、国連・安全保障理事会改革など政治・安全保障も含めた広範な議題も話し合われるようになってきている。㊯『ASEAN+3 (日中韓 ASEAN 首脳会議) について』、『ASEAN+3 協力』(門間理良)

などの表現を使うこともある。(浅野亮)



一超四強 いっちょう よんきやう ㊦一超四强

㊦ yīchāosìqiáng ㊦ one super power and four powers

唯一の超大国・米国と、大国としてのロシア、EU、日本、中国による国際政治構造。EUは国家ではないので、極という言葉で説明されることがある。「一超多強」とも称される。中国の基本的な対外認識を示す言葉。

1991年のソ連崩壊以後、それまでの米ソ二極体制が米国を唯一の超大国とする構造に変化したという認識を表す。中国の安全保障政策に強い影響力を持つ閻学通（清華大学教授）によれば、日米同盟、欧米間のNATO、中露間の戦略的協力パートナーシップという三つの戦略的関係から成り立っている。

閻学通は、米国の唯一の超大国としての地位に大きな変化はないが、「多強」の中で、EUが欧州の大国にかわり自律性を高めて一つの行動単位となりつつあり、中国の地位が相対的に上昇、日露のそれは下降したと論じた（《人民網》2004.12.24）。また、2001年の「9.11」テロ事件以後、米国の単独主義が顕著となり、また同時にインドやブラジルなどの新興大国の台頭によって、この枠組みは挑戦を受けていると観察する論者が中国で増えている。

なお、国際スポーツや自動車業界の競争をめぐり、「群雄割拠」や「一超多強」



于永波 うえいはい ㊤ 于永波 ㊤ Yú Yǒngbō  
 1931.9-。元中央軍事委員会委員・総政治部主任・上将。遼寧省瓦房店出身。満州族。47年9月東北民主連合軍に入隊し、通信員、宣伝隊員などを経て63年に師団政治部宣伝科長に抜擢。65年連隊副政治委員、72年師団政治委員、78年広州軍区司令部弁公室主任、83年軍政治委員、85年南京軍区政治部主任を歴任。89年11月総政治部副主任に昇任。92年10月中共中央軍事委員会委員、総政治部主任を担当。2003年3月国家中央軍事委員会委員引退。93年5月上将拝命。



16歳で入隊したために戦士になれず、通信員・宣伝員として活躍した。ただ、当時の通信員は前線と指揮所の間を走って連絡するので、危険性はかわらない。朝鮮戦争では最初に朝鮮に入った42軍に属したと言われている。42軍の出身なので第四野戦軍系に属するが、南京軍区に勤務した後は、同軍区政治委員だった郭林祥に従って異動しているようなので、鄧小平に通じた人物としてよい。(高橋博)

ウェーキ・ホーミング魚雷 ウエーキ・ホーミング  
ウエーキ ㊤ 尾流自導魚雷 ㊤ wēiliú zìdǎo  
ウエーキ ㊤ wake homing torpedo

魚雷の一つ。発射後、目標の航跡（ウェーキ）を探知すると、事前の調定に基

づき右または左に変針して航跡を追尾し、目標を攻撃する魚雷。(山内敏秀)

ウルムチ陸軍学院 ウルムチリクぐんがくいん ㊤ 烏魯木齊陸軍学院 ㊤ Wūlǔmùqí Lùjūn Xuéyuàn ㊤ Wulumuqi Army School

陸軍の初級指揮学院。歩兵、辺防（国境警備）部隊の指揮官、人武部指揮官、および民族語の翻訳官や医務要員を養成する軍事学院。また同時に軍区各部隊の参謀、政治指導員、補給幹部等に対する軍事訓練も行っている。同学院は新疆ウイグル自治区の首都ウルムチに所在する。1999年に西安陸軍学院ウルムチ分院を改名して発足した。多民族から構成された教師らと教育管理隊からなり、軍事理論、人武、辺防、翻訳等それぞれの教育研究室を有しているとされる。㊤ 歩兵、中国人民解放軍 ㊤ 《軍隊（武警）院校報考》(開山克彦)



衛戍区（北京軍区衛戍区）えいじゅく  
（ペキンぐんく） ㊤ 卫戍区（北京军区卫戍区）

㊤ Wèishùqū (Běijīng Jūnqū Wèishùqū)

㊤ Beijing Garrison

首都の警備・守備のために組織された軍事組織。司令部、政治部、後勤部などの指導機構があり、当該地区の軍事警備、治安維持、軍紀風紀の維持、組織その他の守備を行う。これには北京軍区衛戍区があり、首都北京の警備・守備任務を遂行する。部隊は北京軍区の建制に隷属すると同時に、中国共産党北京市委員会の軍事工作部門と北京市政府の兵役工作機構に属し、北京軍区と党北京市委員会、北京市政府の二重指揮を受ける。㊤軍区

㊤ 《当代軍官百科辞典》（関山克彦）

HY-1 エイチワ  
イイチ ㊤ 海鷹1 ㊤ Hǎiyīng-1

㊤ HY-1, CSS-N-2

対艦ミサイル。シルクワーム（Silk Worm）とも呼ばれ、1960年代に旧ソ連の技術を基に開発した地对艦ミサイルで、英語で蚕の意。中国名は「海鷹」。80年代のイラン・イラク戦争ではタンカー攻撃に使用された。

76年に艦載用の対艦ミサイルとして開発し、さらに改良を加え87年2月に艦対艦ミサイルとして完成させた。全長5.8m、ミサイル直径0.75m、発射重量2300kg、弾頭重量400kg。射程距離は85kmで、終末レーダ制御とされる。

㊤ 艦対艦ミサイル ㊤ 《中国導弾及其戦

略》、‘Chinese Defence Today’（関山克彦）

HN (HY) -5 エイチエヌ（エ  
イチワイ）ご ㊤ 紅纓5

㊤ Hóngyīng-5 ㊤ HY-5 Surface-to-Air Missile

超低空域用の携帯式（肩掛け用）の防空ミサイル。英語名ではHY-5またはHN-5と表記されている。1975年3月から研究開発を進め、85年4月に完成した。開発当初は旧ソ連製のSA-7を手本に模倣し、その後研究開発をする過程で若干の改造を行い完成させた。それぞれ陸・海・空三軍の部隊に装備されている。



HY-5 (<http://academy2003.cpst.net.cn/popul/guard/manys/article/30122150011.html>)

HY-5の主要諸元は全長1.5m、重量13kg（兵士が担ぐ発射筒は3kg）、最大射程4000m、最小射距離800m、最高射高2500m、最低射高50m、迎撃時の目標速度は150m/secを超えず、追尾攻撃時の目標速度は260m/secを超えず、ミサイルの燃焼速度は5秒を超えない範囲が必要で、目標の飛行速度等に制約を受けるとされる。

このため、さらに改良を加え、例えば赤外線誘導の反応感度を高めて、太陽光や雲層などの自然界による影響力を低下させたり、弾頭の爆発力を高めるなどしたとされている。HY-5は改良型のHY-5

A、HY-5B のほかに、発射機をトラックに 8 個とりつけ、TV カメラや赤外線カメラをとりつけた HY-5C モデルもあるとされている。㊦ QW-1、QW-2、携帯式 SAM、防空ミサイル ㊧《中国導彈及其戰略》、‘Chinese Defence Today’ (関山克彦)

HQ-1 <sup>エイチキ</sup><sub>ユウイチ</sub> ㊨红旗1 ㊩ Hóngqí-1

㊦ HQ-1 Surface-to-Air Missile

中高空域対応の防空ミサイル。旧ソ連製の防空ミサイルを模倣したもので、1960 年ごろから開発を進め、64 年に完成した。HQ-1 の諸元は全長 10m、最大直径 0.5m、重量約 2500 kg、弾頭重量 120 kg である。また射程距離は 30 km で、飛行高度 3000-25000m の目標に対して射撃可能である。

中国空軍の防空部隊に HQ-1 を配備した当初は、高空域を飛行する米軍製 U-2 偵察機および無人偵察機に対し射撃を実施し、その結果、数機を撃墜することができたとされる。しかしその後 U-2 偵察機およびその他の無人偵察機が電子戦能力を保有した以降は、HQ-1 に対電子戦能力がないため撃墜することができなくなり、HQ-1 の運用範囲が限られることになった。㊦防空ミサイル、HQ-3、HQ-7、HQ-61A ㊧《中国導彈及其戰略》、‘Chinese Defence Today’ (関山克彦)

HQ-2 <sup>エイチキ</sup><sub>ユウニ</sub> ㊨红旗2 ㊩ Hóngqí-2

㊦ HQ-2 Surface-to-Air Missile

全空域対応の地对空ミサイル。红旗 1 (HQ-1) を基礎に対電子戦能力を付加した防空ミサイルである。1962 年から開発をはじめ、各種試験を通じて完成させた。本格的に HQ-2 の大量生産を開始したのは 66 年 5 月からである。それ以来、80 年代の終わり頃まで、HQ-2 は中国の防空任務を担い続けた。現在でも、一部の重視する空軍に配備されている。

HQ-2 は 67 年 9 月 8 日、米製 U-2 高空域偵察機を中国東部の上空で発見し、撃墜したとされている。HQ-2 にはその後改良を加えたモデル、HQ-2A、HQ-2B、HQ-2F、HQ-2J、HQ-2P など、性能の異なる防空ミサイルがあり、低空域、中空域、高空域の全空域での防空能力の向上を図ってきたとされる。

ベーシックの HQ-2 は旧ソ連製 V-75 (SA-2) を基礎に改良したモデルである。HQ-2A はベトナム戦争の経験を基に、低空域および電子戦に対応できるよう HQ-2 をさらに改良したモデルで、73 年から改良を進め、最終的に完成させたのは 84 年 6 月である。HQ-2B は HQ-2A をさらに改良したもので、機動力、ミサイル誘導、ECM 能力、弾頭威力等を強化したモデルで 90 年代はじめに導入された。

HQ-2 は現在、1000 を超える発射機と約 1 万基のミサイルが解放軍にあり、そのほとんどが空軍の防空部隊で運用され、主要都市や重要な施設などの防空任務にあっているとされる。通常、大・中都市に 1 個の HQ-2 防空連隊が配備され、これには 6 基の発射機を持った防空大隊 3 個が編成される。また、海軍の沿岸防備部隊も港湾防衛のため HQ-2 地对空ミサイルを装備しているとされる。

HQ-2 は高々度を飛行する戦略爆撃機や偵察機に対応できるよう大きな 2 段式のミサイルを採用している。主要諸元は全長 10.649m (HQ-2/A)、10.8m (HQ-2B)、直径 0.5m、重量 2211 kg (HQ-2)、2322 kg (HQ-2B)、高度 3-24.5 km (HQ-2)、1-27 km (HQ-2A/B)、射程距離 12-32 km (HQ-2)、8-34 km (HQ-2A)、7-40 km (HQ-2) である。㊦防空ミサイル、地对空ミサイル、HQ-1、HQ-3、HQ-7、HQ-61A ㊧《中

国導弾及其戦略》、‘Chinese Defence Today’ (関山克彦)



HQ-2 (<http://www.bqtpk.cn/bqtpk/zg/zgdd/fkdd/hq2/hq206.jpg>)

HQ-3 エイチキ  
ユウさん ㊦ 红旗3 ㊧ H6ngqí-3  
㊨ HQ-3 Surface-to-Air Missile

高空域高速機に対応した防空ミサイル。米製 U-2 偵察機の性能をさらに向上させた SR-71 偵察機（高空高速偵察機）に対応できるように 1965 年から研究開発をはじめ、1974 年に完成した。主要諸元は弾頭重量 50 kg、速度 1500m/sec、射高 3 万 2000m、射程 45 km である。  
㊩ HQ-1、HQ-2、HQ-7、HQ-61A ㊪ 《中国導弾及其戦略》、‘Chinese Defence Today’ (関山克彦)

HQ-61A エイチキユウ  
ろくいちエー ㊫ 红旗61A  
㊬ H6ngqí-61A ㊭ HQ-61A Surface-to-Air  
Missile

中低空域用の機動式防空ミサイルシステム。現在、限られた数だがいくつかの集団軍の防空旅団に配備されている。HQ-61A の開発は 1960 年代から進められ、第 1 世代の海上用の短距離防空ミサイル HQ-61 を陸上用に開発したものである。

基本的な HQ-61A のコンセプトは 76 年に決まり、79 年にはプロジェクトが立ち上がり、86 年から試射が開始された。生産がはじまったのが 89 年で、最初に導入した部隊は 38 集団軍の防空旅

団であった。しかし、90 年には HQ-61A よりも能力の高い HQ-7 防空ミサイルが開発されたために、HQ-61A はさほど数多く生産されることはなかった。

HQ-61A は通常、4 両のトラック（機動発電機車、指揮車、搜索および照射レーダ車、目標表示レーダ車）および 24 基のミサイルから構成されている。HQ-61A 防空ミサイルは固体燃料を使用し、主要諸元は全長 3.99m、直径 0.28m、発射重量 300 kg、飛行速度 3 マッハ、最大高度 8 km、射程 2.5-10 km である。㊮ HQ-1、HQ-2、HQ-3、HQ-7 ㊯ 《中国導弾及其戦略》、‘Chinese Defence Today’ (関山克彦)



HQ-61A (<http://www.junshijia.com/ziliao/2005-12/20051229202601.htm>)

HQ-7 (FM-80) エイチキユウ  
なな (エフエムはちまる) ㊰ 红旗7(飞蠓80) ㊱ H6ngqí-7 (Fēimèng-80)  
㊲ HQ-7 (FM-80) Surface-to-Air Missile

超低空域用の防空ミサイル。別名「飛蠓 80 (Fei Meng -80)」とも呼ばれている。陸軍および空軍がそれぞれ防空用として HQ-7 を装備している。空軍が導入した HQ-7 はミサイルをシェルターの上に搭載したモデルで、空軍の防空師団あるいは防空旅団に装備されている。他方、陸軍が導入した HQ-7 は自走式車両の上に直接搭載したモデルを導入し、これらが集団軍の防空旅団に配備されている。